

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04157

研究課題名(和文) 地域における独り死を支援する人たちの支援モデルに関する研究

研究課題名(英文) Study of backup model of the professions for living alone people in community

研究代表者

柴田 有記(大賀有記)(OGA, Yuki)

愛知県立大学・教育福祉学部・准教授

研究者番号：30708748

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：独居高齢者の在宅緩和ケアに関わる在宅医療ソーシャルワーカーやケアマネジャーら福祉職は、所属組織と、その組織を越えたチームで業務を行っている。彼らの業務遂行バックアップのためには、スーパービジョンの連携体制を組み、チーム機能を十分発揮できるように促すことが必要である。その体制下で、支援者のグリーフワークの理解と対応、悲しみの啓蒙、高齢者の自己決定支援の意義の再検討、解決できないことへの対応等について、定期的かつ頻回なスーパービジョンで取り扱うことが必要である。このようなスーパービジョン体制は、在宅緩和ケア領域のメソ・マクロレベルのソーシャルワーク支援の評価に貢献できると考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在宅緩和ケアに関わる在宅医療ソーシャルワーカーやケアマネジャーら福祉職の業務バックアップ策として、所属組織とチームのスーパービジョン体制の連携という観点から言及したことは学術的意義がある。そして、定期的かつ頻回なスーパービジョンで取り扱う内容として、支援者のグリーフワークの理解と対応、利用者の意思を実現できない状況下においても自己決定支援を行う意義等を示した。このスーパービジョンの連携体制は、メソ・マクロレベルの組織構造的なものであり政策策定過程にも関与する。このようなマクロの構造の中で、福祉職の業務バックアップ策を位置づけて提示したことは社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：Home healthcare social workers, care managers, and other welfare professions involved in home palliative care for the elderly living alone work with their own organizations and teams beyond those organizations. In order to back up their work performance, it is necessary to establish a supervision cooperation system and encourage them to fully exercise their team functions. Under that system, regularly and frequently, 1) understanding and responding to grief work of the staff members, 2) enlightening bereavement, 3) reconsidering the significance of self-determination support for the elderly, and 4) responding to problems that cannot be resolved. We believe that such a supervision system can contribute to the evaluation of meso/macro level social work in the field of palliative care at home.

研究分野：社会福祉学

キーワード：在宅緩和ケア 独居高齢者 危機介入 スーパービジョン グリーフワーク チーム機能

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

人生の終末期を過ごす場合は、病院から自宅などの生活の場に移行してきている。在宅医療・在宅福祉領域の支援者たちはチームを組んで、懸命に利用者を支援している一方、利用者の死の過程に直面し、疲弊している現状がある。特に独居高齢者の在宅看取りにかかわる現場では、支援者が家族役割を求められたり、支援者自身の死生観が揺るがされたりするなど、その精神的疲弊の度合いは大きい。また在宅医療ソーシャルワーカーやケアマネジャーなどの福祉職は医療職と異なり、死と死の過程を学ぶ機会が皆無に近く、彼らの業務遂行困難感は大きくなっている。そこで、在宅支援チームの中でも特に福祉職に焦点を当てた業務バックアップ体制整備が喫緊の課題と考えられた。

2. 研究の目的

地域における独居高齢者の在宅療養・在宅緩和ケアに関わる専門職たち、とくに在宅医療ソーシャルワーカーやケアマネジャーなど福祉職に焦点を当て、在宅支援チームの支援モデルを提示することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 支援者支援についての概念・方法論研究 (H28 年度)

(2) カナダ・ケベック州・モントリオール市キャベンディッシュ地区におけるホームケアチームのソーシャルワーカーへのインタビュー調査 (H28 年度)

(3) 独居高齢者の在宅看取りにかかわる支援を経験した、在宅医療ソーシャルワーカーとケアマネジャーへのインタビュー調査 (H29 年度)

(4) カナダ・ケベック州・モントリオール市キャベンディッシュ地区におけるフィールド調査およびホームケアチームのコーディネーターへのインタビュー調査 (R1 年度)

(5) 独居高齢者の在宅緩和ケアに関わる、在宅医療ソーシャルワーカーとケアマネジャーとの業務バックアップ体制案の作成 (H30～R1 年度)

4. 研究成果

(1) 支援者支援についての概念・方法論研究 (H28 年度)

支援者支援の方法論の代表的なものとして、スーパービジョンとコンサルテーション、デスカンファレンスがある。デスカンファレンスが、対人援助専門職の業務のバックアップに効果的とされるスーパービジョンの機能を含有しているのか、またスーパービジョンにはないバックアップ機能があるのか、を明らかにするために文献調査を行った。その結果、スーパービジョンがもつ管理・教育・支持の3機能を有していることが分かった。一方で、意見交換の機能、ネットワーク機能、地域看取りケアの質向上の機能、等も見出され、デスカンファレンスは在宅緩和ケア体制を整備することに貢献していることが示唆された。

支援者支援策としては、スーパービジョンを中心しつつも、コンサルテーションとデスカンファレンスによって補う形が有用と考えられた。

(2) カナダ・ケベック州・モントリオール市キャベンディッシュ地区におけるホームケアチームのソーシャルワーカーへのインタビュー調査 (H28 年度)

当該地域では、病院死から在宅死への移行が政策的に進められており、高齢化率が高く、在宅緩和ケアの促進が課題となっていた。インタビュー調査から、死をタブー視する風潮の中で市民に対する在宅緩和ケアの啓蒙、市の政策と多様な死生観を尊重した実践とのミスマッチ、等が課題となることが分かった。そのような中でホームケアチームスタッフは支援困難感を抱えており、その対応としてスーパービジョン体制の強化が図られていた。

(3) 独居高齢者の在宅看取りにかかわる支援を経験した、在宅医療ソーシャルワーカーとケアマネジャーへのインタビュー調査 (H29 年度)

日本において12名のインタビュー調査を実施した。在宅看取りが実現困難な要因として、身体的リスクが大きいこと、支援者の精神面のバックアップが難しいこと、チーム機能を十分に発揮することが困難なこと等があげられた。特に独居高齢者の場合、見守りの頻度を判断し、的確な危機介入の機会をえることが課題であった。また利用者本人から支援の評価を十分に得られないことが多いため、支援の評価が難しく、ソーシャルワーク支援の評価の意義についても問われていた。福祉職にとって、死と死の過程を学ぶビリーブメントの啓蒙も重要となる。そして、支援者のグリーンワークにチームや組織がどう対応するかについても課題と考えられた。

(4) カナダ・ケベック州・モントリオール市キャベンディッシュ地区におけるフィールド調査およびホームケアチームのコーディネーターへのインタビュー調査 (R1 年度)

在宅緩和ケアのフィールド状況の進展を確認するため、当該地域を再訪問した。市政の財政悪化の中、健康保健機構 CIUSSS の体制改変があり、ホームケアチームの課題は変化していた。それは、緊急対処法が優先され、在宅生活を望む高齢者の意思の実現が困難であること、高齢

者の自己決定支援の意義の再検討が必要なこと、クライアントの死に直面するケアスタッフの疲弊、などであった。クライアントへの支援を保障するためには、スタッフへのグリーンワークやスーパービジョンによる組織的バックアップが必要とされ、機能していた。特に、独居高齢者の在宅緩和ケアでは、病状の急変や孤立の危険性などをモニタリングし、予測的事前対応が必要である。クライアントだけでなくスタッフをサポートするためには、在宅緩和ケア体制の整備が効果的である。現場実践と地域の政策・計画立案との相互作用に寄与できるスーパービジョン体制、つまりスーパービジョンの連携体制の開発が今後の目標となると考えられた。

(5) 独居高齢者の在宅緩和ケアに関わる、在宅医療ソーシャルワーカーとケアマネジャーの業務バックアップ体制案の作成

在宅緩和ケアは、死という危機に直面する場であることから、危機介入体制をとっておくことが必須である。在宅医療ソーシャルワーカーやケアマネジャーをバックアップし業務を進めるためには、定期的かつ頻回なスーパービジョンを行うことが必須といえる。ここでは、支援者のグリーンワークの理解と対応、ピループメントの啓蒙、高齢者の自己決定支援の意義の再検討、解決できないことへの対応等について取り扱うことが必要である。また彼らは所属組織と、その組織を越えたチームで業務を行っていることから、スーパービジョンの連携体制を組み、チーム機能を十分発揮できるように促すことが求められる。このようなスーパービジョンの連携体制は、在宅緩和ケア領域のメゾ・マクロレベルのソーシャルワーク支援の評価に貢献できるといえる。この体制は、メゾ・マクロレベルの組織構造的なものであり政策策定過程にも関与する。このようなマクロの構造の中で、体制を組むことにより、独居高齢者の在宅緩和ケアに関わる在宅医療ソーシャルワーカーおよびケアマネジャーら福祉職の業務バックアップは機能すると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 大賀有記	4. 巻 20
2. 論文標題 生きる過程を支援するソーシャルワークにおいて死を考える意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会福祉研究（愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科紀要）	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.15088/00003696	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大賀有記・木戸宜子・小原真知子・福山和女	4. 巻 9
2. 論文標題 在宅看取り支援に関わる専門職サポートにおける文化的影響 カナダ・ケベック州モントリオール市CLSC Rene-Cassinのホームケアチームの緩和ケア活動から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間発達学研究	6. 最初と最後の頁 19 41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.15088/00003524	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大賀有記	4. 巻 8
2. 論文標題 地域におけるデスクンファレンスの専門職役割遂行サポート機能 文献レビューからの考察	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人間発達学研究	6. 最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.15088/00003059	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大賀有記	4. 巻 22
2. 論文標題 在宅医療ソーシャルワークの意義に関する考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会福祉研究（愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科紀要）	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	木戸 宜子 (KIDO Noriko) (80386292)	日本社会事業大学・福祉マネジメント研究科・教授 (32668)	
研究 分担者	小原 眞知子 (OHARA Machiko) (50330791)	日本社会事業大学・社会福祉学部・教授 (32668)	
連携 研究者	福山 和女 (FUKUYAMA Kazume) (20257083)	ルーテル学院大学・総合人間学部・名誉教授 (32673)	